（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	大野　哲也
論文題目	冒険的な旅から冒険的な生き方へ ―アジアにおける日本人バックパッカーの「自分らしさ」の軌跡から―		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、アジアにおける日本人バックパッカーの旅をとおして、現代日本社会におけるバックパッキングの文化・社会的意義を、バックパッカーを４類型化し、それぞれの旅の実践例をもとに考察したものである。とくに本論文では、①従来のバックパッキング研究におけるアイデンティティ論の超克、②観光研究の基礎理論であるホストーゲスト論の再吟味、③バックパッキングに関する新しい視点の提示、の３点から分析と検討を行っている。

本論文は、日本国内外におけるフィールドワークによって収集したデータに基づいている。日本では、2004年3月から2010年3月まで、「現役」と「元」バックパッカーに継続的なインタビュー調査が実施された。海外での調査は、2004年10月から2009年9月にかけて、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、中国、ネパールにおいて行われ、日本人バックパッカー、ゲストハウス、旅行代理店、観光局、日本大使館などへの聞き取りをはじめとして、申請者自らが実際にバックパッキングをしながらデータ収集を行っている。

本論文は２部構成をとる。第１章は全体の序論に相当し、先行研究を整理しつつ、バックパッキングの特徴が「常道をはずれる」「現地の文化に浸る」の２点にあることを確認したうえで、42名のバックパッカーを、移動型、沈潜型、移住型、生活型という独自の類型に分類した。移動型は頻繁に移動して可能な限り多くの異文化を経験する者、沈潜型は気に入った町で長期間滞在し、その町を「わかる」ことに旅の面白さを見出す者、移住型は沈潜が高じてその町に移住する者、生活型は旅をすること自体が日常化する者と定義している。

第１部（第２章～第４章）では、バックパッキングをアイデンティティという観点から論じている。第２章で、日本人バックパッカーの旅の歴史的変遷が考察されている。そもそもバックパッキングは、「新植民地主義」とすら批判されてきたマス・ツーリズムに対するオルタナティブな選択として注目されてきた。しかし、本章は、そのバックパッキングもグローバリゼーションの進行とともにマス・ツーリズムと同様に商品化されつつあることを、事例にもとづき論じている。

第３章では、そのような商品化されつつある現代のバックパッキングにおいて、日本人バックパッカーはいかにしてアイデンティティの刷新を達成しているのか、そのメカニズムを移動型の旅を追いながら分析している。さらに彼らのアイデンティティ刷新の言説が広まることによって、日本社会で、バックパッカーの再生産サイクルが形成されることを

明らかにしている。

第４章では、バックパッキングとパッケージ・ツアーの最大の相違点が、リスクを冒す好奇心と冒険心にあることを指摘したうえで、旅行という「レジャー」活動で、あえて危険に身を投じていく意味について検討している。ここでは、リスク体験に「成功」した者がより「強い」アイデンティティを獲得できるのに対し、リスク体験に失敗した者は「自己責任」を問われて糾弾されるとともに、彼らの行為が「社会問題化」することで、バックパッキングが危険な旅であるという表象が社会的に形成されることを明らかにしている。さらに、それによって再帰的に、リスク体験に「成功」したバックパッカーの経験の価値が相対的に上昇することを指摘している。

第２部（第５章～第７章）では、バックパッキングをコミュニティという観点から論じた。第５章で、カトマンズのバックパッカー・コミュニティ、タメルの生成史をグローバリゼーションとの関連から考察し、日本人が集結する日本人宿の形成メカニズムを、沈潜型の事例を用いながら分析している。ここでは、「常道をはずれる」「現地の文化に浸る」というバックパッキングの本来のあり方からすれば成立しえないバックパッカー・コミュニティを事例に、旅の商品化によってルートが画一化し、その結果ルートの結節点でバックパッカーが集団化するという現代型バックパッキングの特徴を照らし出している。さらに、沈潜することに旅の面白さを感じているバックパッカーの志向性が、コミュニティ形成の要因となっていることも明らかになった。

第６章では、タメルに移住して観光産業に従事している移住型に焦点を定め、現在でも観光研究の主要概念であるホストーゲスト論に批判的検討を加えている。ネパールと日本の二つの社会を同時に生きるという移住型の生活実践を追いながら、彼らの生き方がコミュニティの生成に寄与していることと、流動化がすすむ現代世界におけるホストとゲストは相互転換の可能性が常に開かれている暫定的な位置関係に過ぎないこととを指摘している。

第７章では、タイ北部のパイにおいてコミュニティを作っている生活型の事例を考察しながら、彼らが培ってきた旅のテクニックが社会制度にまで変革をもたらす可能性があることを指摘している。バックパッキングのテクニックが生活実践と融合する過程を追いながら、バックパッキングが単なる旅の一形態ではなく、生き方の技法と接続していることを明らかにした。

終章である第８章では、これら一連の考察をまとめつつ、次の３点を結論として提示している。①日本人のバックパッキングのなかには、達成主義的価値観を主特徴とするものがある。②バックパッカー・コミュニティの生成にみるように、ホスト―ゲスト関係はときに転換される。③自己決定権を持つバックパッキングは、多様な生やアイデンティティを生成させるという文化・社会的意義をもつ。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、「私にとって旅は何だったのか」という問題意識から出発し、アジアにおける日本人バックパッカーの旅を事例研究の対象として、現代日本社会におけるバックパッキングの文化・社会的意義を、①バックパッキング研究で議論されてきたアイデンティティ論の超克、②観光人類学で議論されてきた旅行者と旅行地との関係をめぐるホスト-ゲスト論の再検討、③新たなバックパッキング論の提示、という観点から分析を進め、考察したものである。「人はなぜ旅をするのか」は、巡礼の研究を始め、文化人類学においても関心を集めてきた問題の一つであるが、1970年代以降、バックパッキングという旅の形態は新たな観光形態として，その意義が問われてきたものである。本論文は、日本、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、中国、ネパールにおいてフィールドワークを実施し、現地の観光情報、バックパッカーの実態に関するデータの収集のみならず、ライフヒストリーの手法を用いた42名のバックパッカーからの語りの収集をもとに分析を進めた点で、これまでのバックパッキング研究にない実証的研究である。

本論文の評価すべき点は、大きく以下の３つにまとめることができる。

第１に、外国由来のバックパッキングという「旅」の形態の日本における受容と定着という、その動態を見事に描いた点である。もともと、バックパッキングは「常道を外れる」「現地の文化に浸る」といった、いわば「非制度化された形態の観光」であった。しかし、日本社会における受容と普及の中で、マス・ツーリズムと同じようにパッケージ化され、商品化されていくという、一種の日本的な受容―日本化―がみとめられる。一方、その対極として、バックパッキングそのものを個人が生き方の技法として取り入れる場合があることを明らかにした。このように、バックパッキングが多様な形で定着していることを豊富な事例をもとに実証的に明らかにし、日本人バックパッカーは、移動型、沈潜型、移住型、生活型の４類型に区別できるという独自の見解を示した。

第２に、「旅」とアイデンティティとの関係が日本社会における達成主義的価値観を背景に日本化されていることを、語りの分析をとおして指摘した点である。とくに、移動型では、バックパッキングがこれまでの研究で指摘されてきた強く新しいアイデンティティの獲得を特徴とするというよりも、「なりたい自分になれる」という達成主義的アイデンティティ獲得の場となっていることを解明した。さらに、バックパッカーは自己実現の成功物語を資源化して日本社会に再参入する。このとき価値観の転換はみられず、日本社会との間に循環的関係を成立させていることが明らかにされた。

第３に、バンコクのカオサン地区における日本人宿、カトマンズのタメル地区、タイ北部パイのムーン・ヴィレッジという事例分析をとおして、「現地の文化に浸る」というバックパッキングの理念型とは相反する、日本人同士の集中化やバックパッカー・コ

ミュニティの生成を明らかにした点である。そして、タメルでは、バックパッカー・コミュニティの成立の背景には、日本文化的な「群れる」属性のみではなく、現地社会との積極的な経済的・社会的相互作用があること、ホスト-ゲスト関係の柔軟な相互転換性が明快に論証された。一方、ムーン・ヴィレッジでは、日本人同士「群れながら」ではあるが、「旅を生き続ける」という、新しいバックパッキング形成の実態が示された。

本論文は、所期の目的であったバックパッキング研究におけるアイデンティティ論の超克、ホスト-ゲスト論の再検討、および新たなバックパキング論の提示という点では、理論的には飛躍的な展開や新しいモデルの提示に成功したとまでは言い難い。観光人類学としての理論的野心がもう少し望まれるところである。また、バックパッキングになぜ挑戦するのかについて、受苦的経験の身体化という点からの考察が求められるところである。さらに、この論文で提示した日本人バックパッカーの実態が外国人バックパッカーの事例と比較検討され、バックパッカー一般論の中で位置づけられることも必要であったといえる。しかし、日本人バックパッカー研究がまだ少ない現状の中で、海外における日本人バックパッカーの豊富な事例をもとに、日本社会が生み出した海外バックパッカーの傾向を具体的に分析し、新しいモデルを提示した点では、バックパッカー研究における非常に貴重な民族誌研究といえるものである。本論文は、日本人バックパッカーの事例をとおして、グローバル化が進む現代にあっても外国文化の受容がローカルな文脈に則して進展するという、外来文化の土着化過程の一端をみごとに描いた点は高く評価できるものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成22年7月7日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降